

## 第40回 STARTプログラム（スペイン）

2017年3月10日から26日までの約2週間、第40回 STARTプログラム（スペイン）に学部1年生20名が参加しました。社会科学研究科の中坂恵美子教授、鈴木一敏准教授、ほか2名の引率職員と共に、スペインのタラゴナにあるロヴィラ・イ・ヴィルジリ大学（URV）へ留学しました。

URVでは、現地のスペイン語教師及びURVでスペイン語の教授法を学ぶ大学院生によるスペイン語授業のほか、英語での講義（スペインの市民戦争やカタルーニャ独立運動、モダニズム建築、ツーリズムと環境問題について等）を受講しました。英語での授業は難しかったようですが、講義で学んだ内容は全て、エクサカーションで実際に訪れる場所に関する予習として構成されており、非常に有意義なものでした。また、スペイン語の授業では、10名1クラス編成で2クラスにレベル分けされ、きめ細かいケアの元、授業を受けることが出来ました。最初の数日は頭が全くスペイン語についていかず、戸惑う学生が殆どでしたが、だんだんと、習ったフレーズをホストファミリーとの会話に取り入れるなどして、積極的にアウトプットできるようになりました。

市民戦争の爪痕が残るエブロ川沿いの史跡を訪れた際には、その生々しさに皆大変な衝撃を受け、平和の大切さを実感しました。また、タラゴナ旧市街地には、ローマ時代の遺跡が多く保存されていますが、単なる観光ではなく、ローマ時代のタラゴナの政治的役割や建築物について学ぶことができ、非常に良い経験となりました。カタルーニャ地方伝統の、カステルという人間タワーを作るお祭りの練習場にも足を運び、学生は現地の人間タワーのチームメンバーに混じって実際にタワーを組んでみるなどの貴重な体験をしました。その他にも、モンサンベネット修道院での地中海料理の調理体験、ガウディの生誕地でモダニズム建築が有名なレウス訪問など、カタルーニャの歴史文化に直に触れる体験を多くできました。

2週目には、最終日のスペイン語でのプレゼンテーションに向けて準備を始め、それぞれに、スペインの歴史や食文化・建築物などから興味があるテーマを設定し、スペイン語で発表を行いました。最初は不安しかなかった学生たちですが、完璧な文法を使うことなく、自分の言葉で相手の目を見て伝えることが大切であると学び、それを実践に移す努力が見えました。このプレゼンテーションを通して体得した学びは、STARTプログラムで学生が培うべきグローバル・コア・コンピテンシーの根幹であり、学生たちにとって今後の大きな糧となりました。また、ホストファミリーと最初に会った時にはぎこちなく挨拶していた学生が、最終日には涙の抱擁をし、別れを惜しみました。

学生たちは、この経験を第1歩として、語学力のみに留まらないコミュニケーション能力を向上させ、より広い視野を持ってこれからの大学生活を過ごすことが期待されます。



ローマ時代の史跡、円形競技場にて



モンサンベネット訪問での地中海料理体験



スペイン語の授業風景



最終日、プレゼンテーションを終えて